

令和7年度 第4回

# 印西市総合教育会議

## 会議録

令和7年8月21日

令和7年度 第4回 印西市総合教育会議 会議録

日時：令和7年8月21日(木)  
14時00分～16時40分  
場所：印西市役所 農業委員会会議室

1. 開会
2. 市長あいさつ
3. 議題
  - (1) 印西市が目指す教育の姿とは
  - (2) 学びの当事者は子ども ～自他への信頼を培う学校を～  
講師：学校法人茂来学園 大日向小学校 校長 久保 礼子 様
  - (3) 子どもの主体性や多様性を尊重した教育を  
これからの学校現場でどう実現するか (ディスカッション)
4. 閉会

出席者(6名)

印西市長 藤代 健吾  
印西市教育委員会 教育長 渡邊 義規  
印西市教育委員会 教育長職務代理者 寺田 充良  
印西市教育委員会 委員 豊田 光弘  
印西市教育委員会 委員 長尾 香奈  
印西市教育委員会 委員 屋敷 毅

講師

学校法人茂来学園 大日向小学校 校長 久保 礼子 様

市長部局

副市長 野崎 崇正  
企画財政部長 米井 雅俊  
企画財政部企画政策課長 武藤 誠  
企画財政部企画政策課政策推進係長 藤代 悠子

教育部

教育委員会教育部長 伊藤 章  
教育委員会教育部教育総務課長 鈴木 圭一  
教育委員会教育部教育総務課総務係長 中野 竜一  
教育委員会教育部学務課長 加藤 知己  
教育委員会教育部教育DX専門官 松本 博幸  
教育委員会教育部教育センター所長 斉藤 睦雄

(午後2時00分)

企画政策課長  
(進行)

それではただいまから令和7年度第4回印西市総合教育会議を開会いたします。

会議の議長は、印西市総合教育会議設置要綱の規定により、藤代市長にお願いいたします。

藤代市長  
(議長)

それでは始めさせていただきます。改めまして皆さんこんにちは。

今日でですね、今年度でいうと4回目の総合教育会議になります。

これまで、教育ビジョンの策定に向けて総論的な、教育長と私の考え方であるとか、不登校支援、職員の皆さんの働き方改革の話と、議論を進めてきましたけれども、本日はそういったものも踏まえながら、もう一度この市の教育の方向性について、まずは冒頭20分ほど教育長の方からお話をいただきたいと思っています。

内容については、これまでの総合教育会議での議論に加えて、この会議の裏側で、教育ビジョンの策定に向けたワーキンググループというのが庁内にありますけれども、そちらで職員の皆さんがいろいろと考えてくださったことも踏まえながら、今日、教育長の方からお話をいただきたいと思っています。

その上で、後半、先ほど事務局の方からも紹介がありましたけれども、今日、大日向小学校から久保校長先生にお越しいただいております。

おそらく教育業界で久保先生のことを知らない人ってなかなかいないと思うんですけども、今の日本でも非常にこのイエナプラン教育というのが徐々に浸透し始めているというところですね。

もともと、ドイツでしたっけ、発祥は。広がっていったのがオランダで、子どもたちの主体性とあとは多様性の中でともに生きていくというようなところを主眼にした教育プログラムで、非常に日本でも注目をされているものであります。

その中で大日向小学校というのが、日本で最初にイエナプラン教育を本格的に導入されて推進されてきた学校ということで、ぜひ久保先生のお話を聞いてみたいということで、今日かなり無理をお願いをして来ていただいたということでもあります。

先生がよく使われるイエナプランのキャッチフレーズの中で、自立する、ともに生きる、世界を見るというワードがありますけれども、まさに我々が今までこの総合教育会議で議論してきたことなのかな、と思っています。

まずは主体的に自分がどう生きていくのか。そして、いろんな方がいるわけなので、その中でどうやってともに生きていくのか、そして我々はやっぱり社会の中で生きていくわけなので、社会・世界とどう向き合っていくのか、まさにこれが我々が教育の中で考えていかなければいけない論点なんだろうと思っていますけど、まさにそれを、一番に担当されているのが大日向小学校であり、久保先生だと思いますので、後半は、先生の今ま

でのご経験、そしてご知見をご共有いただきながら、これからの市の教育について、どうしていったらいいのかということ、前半の教育長からの、論点出しというか、教育長からの話も踏まえながら議論できればと思っていますところでもあります。

それでは、最初に議題1ということで教育長の方から印西の教育の方向性ということで、ご説明いただければと思います。

渡邊教育長

それでは、今市長からありましたように、まず私から、仮称ですけども、印西市教育ビジョンという事で、この令和7年5月から野崎副市長を中心に市長部局である、企画政策課と教育委員会の職員とで構成したワーキンググループを立ち上げまして相当数議論を重ねて参りました。

今回は総論となる部分について、委員の皆様と共有をさせていただき、ご意見をいただこうと、考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめにというところで、これは第1回の総合教育会議でご説明させていただいたことなんですけれども、印西市教育大綱とそれから、印西市教育振興基本計画、これまでは、市長部局と教育委員会、それぞれで策定をして参りました。

しかし、環境の変化が激しく、正解がないと言われる時代において、未来を担う子どもたちが幸せに生きる力を育むことこそが、市における最優先事項ではないかということ、また、教育に関する課題がこれまで以上に多様化する中で、市長部局と教育委員会が目指すべき教育を一緒に考えて、一体となって推進していく必要があるのではないかというふうに考えまして、教育大綱と教育振興基本計画を一本化して、名称を印西市教育ビジョンとして策定していきたいと考えております。

まず、今インデックスですけども、これまで議論してきた総論となる部分についてですね、ここに掲げております8項目にまとめていますので、そちらについてこれから説明をさせていただきます。

初めに、世界潮流ということで、こちら第1回目の総合教育会議で市長から説明のあった資料でございます。

私たちを取り巻く環境について、急激に変化しておりまして、世界全体が不確定な時代、つまりVUCAの時代となっている中、またグローバル化やAIの発展が著しい中において、子どもたちが幸せに持続可能な社会の一員として生き抜く力を育むことが世界全体で共通する教育のあり方となっています。私たちもこうした世界潮流を踏まえた教育へ転換していく必要があると考えております。

次に、ここでは変革の方向性というふうに題してございますけれども、これまでの教育と、これからの教育として整理いたしました。

これからの教育は、これまでの正解を教える教育から、問いをともに探求する教育に変えていく必要があります。

つまり、学びは単に提供するだけではなく、学習者である子どもたちそれぞれが中心となる学びへと変わっていきます。

これから策定する教育ビジョンについて、このように世界や日本の教育が変化する中、印西市としてどんな子どもを育てたいか、理想の姿とはどういうものか、また、どう実現していくかということを示して参ります。

印西市では文部科学省のリーディングDXスクール事業指定校として、1人1台端末を活用して、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的対話的で深い学びを実現できるよう取り組んでいるところです。

これからさらに教育課程全体を通じた情報活用能力の育成に留意しつつ、教員が授業改善に努めていくこととなります。

また、今年度、市教育委員会指導課で学習者中心の学びの推進委員会を立ち上げ、専門的な理論や方法の理解と、実践意欲向上を目指しまして、公募で集まった市内小中学校の10名の教員が全6回の講座を受講する取り組みが始まっているところでございます。

教育ビジョンの策定に当たりまして、印西市の教育が目指す姿は何か、どのように目指す姿を実現するのかという2つの論点について、市の考えを示しております。

議論するに当たりまして、まずは目指す姿から次に目指す姿を実現するための戦略を考えるため、検討論点の洗い出しをいたしました。

次になります。

まず論点としては2つです。

1つ目、印西市が目指す教育の姿と、あともう1つが、どのように目指す姿を実現するのかということです。

また、各論点の検討を深めるため、目指す姿を実現するために必要なことは、そのためにはどのような支援が必要か、をサブ論点として設定いたしました。現時点での仮説を整理いたしました。

続いて、印西市が目指す教育の姿とはというスライドの方に移ります。

子どもたち一人一人のウェルビーイングへというところです。このイメージ図は文科省の計画に示されているものとなります。

子どもたちの学びを支える、学校職員のウェルビーイングも重視しまして、子どもたち一人一人のウェルビーイングが学校・家庭・地域、そして社会全体のウェルビーイングに広がって、循環していく未来を目指して参ります。

そのような、未来の目指す姿、つまりウェルビーイングを達成するためには、現代においても変わることのない、「自分らしく生きる」ことや、「他者と繋がる」といった普遍的な価値を基盤としつつ、時代や社会の変化に柔軟に対応する、「未来を創る学び」を通じて、一人ひとりが持続可能な社会の作り手として成長していくことが必要なのではないかと考えます。

次です。

そのために、どのような支援が必要かということで、まず自ら問いを持ち、探求行動をし続けるといった、自分らしく生きる力。ともに学び支え合い、よりよい社会を築くといった他者と繋がる力。これに加えて、これ

からの時代にはデジタル教育やグローバルマインドといった未来を構想し、学びを生かして創造する未来を創る力、が必要であり、この3つの力を育む学びを支えていくことが必要なのではないかと考えます。

また、AIなどのテクノロジーだけではなく、自然に触れ、身体で感じるといった身体感覚も大切にしていきたいと考えます。

次になります。

これからの教育に必要な3つの力を育むために、特に何に力を入れるべきか。

つまり、どのように目指す姿を実現するのかという論点について、印西の教育における、学びの変革を優先的に取り組むべきと考え、印西市の強みと特色を生かした3つのプロジェクトを展開したいと考えます。

今後、ワーキンググループでは、まずは「学校職員：働くプロジェクト」として、子どもたちの学びを支える学校職員を第1に、「子ども：学ぶプロジェクト」、「地域：ともに育むプロジェクト」の3つを柱として、総合教育会議で議論してきた内容を加味しながら、それぞれ重点となる施策を検討して参ります。

以上がこれまでのワーキンググループでまとめた総論となる部分です。

この後、久保先生のお話を受けて、印西市の教育のビジョンに関することを共有しながら、またディスカッションをして参りたいと思います。

私の説明は以上でございます。

藤代市長  
(議長)

はい、それでは教育長からの説明が終了しましたので、今の説明の内容に質問とかコメントがある方は、お願いいたします。

教育委員の皆さん、それから、もしも補足が事務局の方からあれば、よろしいですか。

一旦、私の方から少し補足をさせていただくと、感想も含めてですけれども、議論を踏まえた上でよくまとめていただいたのかな、というところが感想ですね。

その上で、今後、やはりこの方向性の上で、具体的に何をやっていくのかっていうところも1つ大事になってきますし、あとは現場の先生方をどうやって巻き込んでいくのかっていうところが、やっぱり一番の論点かなと思っています。

やっぱり、最終的に現場の先生方が、その我々のビジョンに共感をしていただいて、学びの場を前に進めていくということに対して前向きな思いを持っていただけない限りにおいては変わっていかないかと思しますので、そのあたりについては、今後、この場でもそうですし、事務局、ワーキングの皆さんとも議論をしながら、設計をしていきたいと思っています。

あとは保護者の方々、地域の方々含めて、その学校に関係されている皆さんの思いであるとか、意見をどうやって吸い上げていくのかというところも1つ課題かな、とは思っているところです。

先日、8月の初めになりますけれども、印西市で導入をしているロボッ

チャですね、ロボットでボッチャをするっていう、競技の教材を使って親子向けのワークショップイベントを開催させていただいて、非常に、応募いただいた方々も、多くてですね、70組ぐらいですか、ご参加いただいて、すごくいいイベントだったなと思って、市が進めようとしているデジタル教育について実際に体験をしながら感じていただきながら、その中で、これからどういった教育の場を求めていくのか、どういった場がいいのかっていうことをですね、ロボッチャを行いながら、保護者の方々にもいろいろ付箋に書いていただいたりしていたんですね。

その内容についても、次回か次々回の総合教育会議で共有をさせていただいて、このビジョンの中でどのように反映していったらいいのかっていうところについても、この場でも議論ができればと思っているところです。

その他にどういった保護者の方、地域の方の意見を吸い上げていったらいいのか、ないしは、ともに作っていったらいいのかっていうところについては、事務局の方ともまた議論させていただければと思っているところです。

では、教育委員さんからコメントをもらいます。

感想とかでもいいので、順番にしていきたいと思いますか。

豊田委員から、はい。

豊田委員

教育委員の豊田でございます。

印西市の教育ビジョンにつきまして、教育長から丁寧なご説明いただきありがとうございます。

まず、私が感じたところは、学びの方法、教育実践についてでございますけれども、問いをともに探究する教育への転換が強調されているということで、大変すばらしい計画ではないかと考えております。

また、先生方もですね、教えるということから、伴走者に回るというようなことですので、その意識改革、それに伴う支援体制っていうのがこれから大切になっていくのではないかと考えております。その辺をよろしくお願いを申し上げたいと思います。

もう1点よろしいですか。

地域社会の連携の視点ということでございますけれども、地域とともに育む教育という考え方がやはり明確に示されております。

学校・家庭・地域が一体となって子どもを育てる姿勢が示されており、こういった中で、現在ももうすでに運用されております、学校運営協議会ですとか、そういったものの役割というのも今後かなり重要になってくるものなのかと考えておりますけれども、その辺はいかがなものでしょうか。

以上でございます。

藤代市長  
(議長)

いや非常に大事な論点をご提起いただきありがとうございます。

教育長の方から今の点について、お願いします。

渡邊教育長

本当に現場の支援体制っていうのは、とても重要になってくると思いますが、先ほど一言申し上げましたけど、今年度から指導課の方にですね、学習者中心の学びの推進委員会っていうものを立ち上げて、子どもが中心の学びの体制っていうところで、教員の意識改革を図るための、中心的な役割を果たしてもらえようような教員を10名ですね。そこから各学校へバーッと広げていってもら、そのための基礎的な知識ですとか、専門的なものも含めまして、6回の研修を終えて、というところが、まず支援体制としては始めたところです。

それから、地域との関わりということで、学校運営協議会ですね。今現在、印西中学校区で始まりましたけれども、こちらは当然、やっぱり学校だけではっていうところがありますので、大いにこの学校運営協議会の方々のお力も借りながらですね、地域で、また家庭の力も合わせて、子どもたちを育てていく。これからも令和10年までに全学校で入りますので、続けて参りたいと思います。

藤代市長  
(議長)

続いて、順番にいきます。  
屋敷委員の方から。

屋敷委員

屋敷です。よろしくお願いします。

自分の方から2つほど挙げさせていただきたいのですが、まず市長部局と教育委員会が協力して、印西市教育ビジョンとして一本化することはとても必要かつ重要なことかと思えます。

これを機に、教育の方向性とか目的、環境が変革するためには、人材の支援とかですね、施設の整備、また地域の方の理解を得るとか、様々な関係者の方の力が必要になると思えますので、その辺の周知とか、ご協力をお願いとか、うまくやっていたらいいなと思えます。

またもう1つなのですが、印西市が目指す教育の姿として、ウェルビーイングの循環が描かれています。私が思うには、まず教師の方たちのウェルビーイングが重要であるのではないかと。

また、それが初めの1歩になるのでないかと考えます。

先生方の人間関係とか、労働環境が良好になることによって、子どもたちの成長、また保護者の方々の安心感、地域の方の協力を得ることに結びつくのではないかと考えています。

こんな簡単なことなんですけど、地道に取り組んでいただけたらなあと思えます。

よろしくお願いします。

藤代市長  
(議長)

これも教育長の方から。

渡邊教育長

ありがとうございます。

市長部局と一体化でビジョンっていうところですね、この中でやはり教

育委員会だけではできない部分、これはやっぱり市長部局に財政の面も含めまして、協力していただかないと進められない部分がございますので、屋敷委員がおっしゃられたように、人材の育成とか、施設整備の点についてもですね、そういった目指す方向を1つ同じにしてですね、取り組んでいけたらなというふうに思っております。

また、子どものウェルビーイングというところで、まず第1には教師だろうというお話、ごもつともですね。教員がやっぱり元気に、また誇りを持って明るく仕事をしていただくということが第1だと、前回の総合教育会議でもあった働き方改革なんかもその1つになっていくと思いますのでね。1つ1つ進めて参りたいと思います。

藤代市長  
(議長)

寺田さんは最後の締めということで、長尾さん先に。はい。

長尾委員

ありがとうございます。

まず今回のテーマが、このイエナプランということで、印西でこのイエナプランを導入していくのかなと初め思ったんですね。

ですから、先ほど教育長とお話する機会があったときにお伺いしたら、いや、これはとても難しいことで、そんなに簡単に導入することは難しいことだっていうふうにお話を伺って、それを実際にこの大日向小学校というところで、どのように導入されているのか、教員の先生方の教育もどのようにされているのか、サポートも(どのようにされているのか)。そういう話を伺えるのがすごく楽しみです。

日本初のこのイエナプランを導入された大日向小学校はまだ開校して6年ほどということ、その後のこの子どもたちがどのように成長しているのか、その後のこともすごく気になっているところです。

まだまだ、この日本では偏差値を中心とした進学制度が根強く残っているところなので、これを印西市として、今日のお話を伺って、どういうところを取り入れていけるのか、一緒に考えていけることをとても楽しみにしております。

よろしく申し上げます。

藤代市長  
(議長)

教育長何か今のコメントに。やっぱりイエナプラン導入は難しそうですか。

渡邊教育長

はい。

そうですね、長尾委員からありましたけれども、いきなりすべてをね、ボンと我々公教育の学校で導入するっていうのは本当に大変だと思っています。

ただ、今日先生のお話で非常にみんな楽しみにしているのですけれども、うちの市でも大きな学校から小さな学校までいろいろありますが、うちの市でも子どもたちの探求力を伸ばしたりとか、またプレゼン力を鍛え

たりとか、そしてそれがどんな人生に繋がっていくのか考えさせるとかで  
すね、大いに参考になる部分、また異学年での集団というところもありま  
すので、そういったことを勉強させていただいて、市の学校でどんなこと  
を取り入れられるかな、できるだけ多くのことは吸収して取り入れていき  
たい、いい部分はやっていきたいというふうに考えているところです。

以上です。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。  
寺田委員の方から、はい。コメントお願いします。

寺田教育長職  
務代理者

まず2つ聞きたいことがありまして、最初は探求型学習やプロジェクト  
型学習、ICTの活用、子どもたちが主体的に学び、考え、協働するスタ  
イルが推進されているされていくとありますが、保護者や市民の中には、  
昔の教育とはどう違うのか、学力は大丈夫か、そういうことについていけ  
るかという声がありますが、まずそれについてお答え願います。

藤代市長  
(議長)

教育長、お願いします。

渡邊教育長

はい。

これまでのやってきたことをすべて否定して新しく始めるっていうこと  
ではないんですね。

これまでやってきたことっていうのも非常に大事な部分ですので、その  
上でさらに1点言えば、教師が主導して授業を進めてきたところを、中心  
を子どもにおいて、教師はサポート役というか、ファシリテーターになっ  
たりとか、そういった役割の転換、そういったことを進めていく。で、決  
して子どもたちだけに任せてずっと話し合っている、探求すると言うので  
はなくて、必要な最低限の知識ですとか、それはこれまでと同じような形  
態で学ぶ場面もありますので、力がつかないんじゃないかと、そういった  
ご意見あるのもごもっともかもしれませんが、そういったことがない  
ようにしっかり生き抜く力をつけさせていく。

その中の1つに学力も入っていますので、そんなことで、その部分心配  
であるのも事実でしょうから、内容の周知というのもこちらで工夫してい  
きたいと思っています。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。

せっかくなので、久保先生、もしも何か一言二言あれば、後程まとめて  
もいいですし、どちらがいいですか。

後の方がいいですか。

ここで前半は以上にしまして。

では続いて、久保先生の方からご講演をいただきたいと思います。

これ何台か同時接続しているんですね、モニターにね。

ちょっと全くの余談なんですけど、YouTube配信ってなかなか総合教育会議でしているところ珍しいと思うんですけども、徐々にレベルが上がっていきまして。最初はこの会場だけの撮影だったところから、前回、オンラインで先生に講演いただいたりとか、こういう形で複数のパソコンモニターにつないでいただいたりとか、徐々に進化をしているところですので、ご視聴の皆さんもその進化を少し感じ取っていただくと幸いです。

はい。先生お願いいたします。

久保氏

**【講演】**

講師：学校法人茂来学園 大日向小学校

校長 久保 礼子 氏

演題：学びの当事者は子ども ～自他への信頼を培う学校を～

藤代市長  
(議長)

久保先生、本当に素晴らしい話をありがとうございました。

やっぱり、まさに今も変化し続けているっていうか、日々試行錯誤をされているんだろうなっていうことをすごく感じていて、今回、この総合教育会議の前に、久保先生初め、大日向小学校の取り組みについて、いくつか記事を拝見していく中で、びっくりしたのが、久保先生が正直に1年目、結構いろんな混乱があったっていう話をされていて、自由に振り過ぎてしまったためにいろいろと問題が起こって、ただそれを、先生方と一緒にまた子どもたちと一緒に議論をする中で、どういうやり方がいいのかっていうのを、そのあとまた作っていったという話をされていて、やっぱりその姿勢が多分、今私たちに一番求められているのかなっていうのを実は感じているところだったんですね。やっぱり変わり続けていくこと。

試行錯誤を失敗とはとらえないで、それは試行錯誤であって、よりよいものを作っていくために進んでいくということで、今も毎週勉強会をされていてっていうのも、本当に素晴らしいなと思ひまして、何かこの感じっていうのですかね。何か我々やっぱり特には市役所、私も含めて市役所職員もそうですし、先生方もそうですし、おそらく日本の多くの組織がそうだと思うんですけど、結構、失敗したくないとか、何かを変えるっていうことは、当然リスクがあるわけなので、失敗していくわけですし、何かいわゆる可能性があるわけで、なんだけど、そうじゃなくて、ある理念のもとで、何かやっ払いこうと思うとやっぱり生徒も変わってくし、状況も変わっていくわけだから、変わり続けなきゃいけないわけで。

それを、失敗ではなくて、その当たり前のように変わっていくことを受け入れるっていうことが、やっぱり必要なんだっていうのを今日改めて先生の話のを伺っていて思ったところですね。

この後議論に移っていきたいと思うんですけども、今日はなるべく皆さんに多めに質問していただきたいので、ちょっと私ももう1個だけコメントをしてすぐに皆さんに振っていきたいと思います。

あと、もう1個すごい大事だなと思ったのが、対話とかリフレクションですね。

この機会がね、おそらく日本のいろんな、教育だけじゃなくて組織においてはすごく少ないと私は思っているんですよ。

大日向小学校の場合は、ポートフォリオであるとか、自分で自分自身を評価するって、いろんな対話の場があって、あれがあると何がいいかっていうと、2つ、私はあると思っています。

1つはやっぱり自分自身との対話ってことだと思うんですけど、自己内省して、さらに言うと、都度リフレクションで今自分がどういう思いであって、今後どうしていきたいかってことを、必ずこう発信していくので、やっぱり自分の判断って言うんですかね、主体性を担っていくってすごく私は大事なものだと思っていますね。

しかもそれをしっかりと対話する中で、というのが、私は大事だと思っています。やはり自分自身の考えというのが、自分だけで考えていてもなかなかまとまらない中で、ここの対話っていうのが、実はすごく有効なツールなんだろうなと思っています。

今、自分自身のこともあるんですけど、もう1つ、やっぱり周りの方々が、その方のことを理解する上で、このリフレクションとか対話ってすごく大事なんだろうなと思っています。

もしかしたら、仮説なんですけど、先生方が子どもたちと日々触れていく中で、子どもたちに接していく中で、この時、子どもたち一人一人の教育のあり方を考えるときに、子どもたちが本当に何を考えているのかっていうことを聞く時間ってどれぐらいあるのかなって、ちょっと思う瞬間があって、当然主体的な学習の場で、いろんなテーマについて、主体的に発表させたいってことはあるんだと思うんですけど。そもそもこの子どもたちは、今、何の課題を感じているとか、何をしたいのかとか、何に関心があるっていうことそのものを、その子どもたちそのものについて、発露してもらって、ともに対応する場ってのが、公教育以外も含めて、さらに言うと、いろいろな会社・組織も含めてなんですけど、少ないんじゃないかなって感じがしています。

そうすると何が起こるかっていうと、相手に対する理解をするための材料がないので、その先に進んでいけないっていうのはあるのかなってちょっと思ったりは、今したんですよ。

私自身もこの10年を振り返ってみると、やっぱりそういう対話とかリフレクションの場っていうのが、自分自身を含めて、さらに言えば、目の前の他者の理解を深めてっていう意味では、すごく成長にとっていい機会だったなあとあって、今日改めてお話を聞いてみて、私はそんなところを感じたところですね。

この後、一応テーマとしては、主体性とか多様性を尊重した教育に向け

てというようなテーマで、4時半ぐらいまで議論をしていきたいと思えます。

まずは今、先生からいろいろとご講演をいただいた内容を踏まえた上で、いろいろな皆さんから質問があるかと思えますので、最初に質問をお受けした後に、後半、今回の講演を受けた上でこれからの印西市の教育をどうしていくのかというところの話を少し具体的にしていければと思っています。

まず、久保先生への質問とかコメントがある方、教育委員の方でもいいですし、事務局は今日、教職経験者の方々が多数いらっしゃいますので、いろいろ聞きたいこともあるかと思えますので、両サイドいろいろと投げかけていただければと思えます。

教育委員の方々がいいですか。それとも、そこは自由に挙手制で大丈夫ですか。

はい、ということで、自由に挙手制ということで、今、事務局の方から許可がおりましたので、はい。こういうルールも駄目なんですよ、きつとね。すみません。

ということで自由に質問等々、またコメントがある方は挙手でお願いをいたします。

こう言うと大体出ないので。（“委員”ではなく）あえて“さん”付けします。豊田さん。フラットな立場でということで

豊田委員

ありがとうございます。

豊田と申します。貴重なご講演いただきましてありがとうございます。

大変興味を持ったのが、評価の部分のお話なんですけれども。数値では評価されないということだと思えますね。それで、自己評価ですとか、またリーダーさんの評価ですとか、そういったものを取り入れて評価していくということで、社会で言うとなんか人事評価的なところが似ているなっていう感じがするんですね。

要は、私はこういう目標を持っていて、これができたから、これが幸せだったって。それに対して、チームリーダーの方が、ここはこうじゃないとかっていう、そういうフィードバック的なものも、もちろんあるということなのではないでしょうか。

それともう1点なのですけれども、数字で表さない評価っていうと、例えば基礎学力ですとか、そういったものに対して、例えば今後、子どもさんが進学をしていく場合に、うちの子どもは読み書き、昔はそろばんとか言いましたけど、そういったものがどの程度のレベルなのかっていうのは保護者の方ってのは不安にはならないものなのではないでしょうか。

藤代市長  
(議長)

それでは久保先生お願いします。

久保氏

特に中学生がその問題を抱えていて、なので中学校は数値評価しています。それで、中学生になったときに、評価のとらえ方について、子どもにも保護者にも説明をして、基本は小学校と変わらない考え方、ただ、受験がある、受験のときに、内申書にはその評価をつけなければいけないので、そのためにつけます。そこでつけられたものに振り回されることはしないで欲しいという願いは伝えます。

ただ、それでもですね、やっぱり5段階評価がつくと、子どもたちはかなりそちらに引っ張られるんですよ。

でも、なぜ、その評価になるのかっていうことについても、それぞれの教科担任が前もって、こういう観点でこういうふうにつけるからっていう説明をものすごく丁寧にやっているし、ついた評価についても、本人と本人に渡した後、もし疑問があれば言うておいでっていうことで、そこで対話の中でその評価が動くこともあるっていうような、そんな感じで、評定は慎重に数値評価します。で、実際の学力についてはですね、本当に一般的な教科書と一般的なドリルのようなものも使いながらやるし、市販のテストもやっているの、ある程度のところまでは親も本人もわかっているはず。保護者は、うちの学校には、そっちよりももっと社会性だとか、生活面のことだとか、いわゆる生きる力のようなものを求めてきているから、あんまりそっちは気にしない。

と言いつつ、でも、本音のところではやっぱり気になるんですっていうことはおっしゃる。それでちょっと塾に話してみたとか、自分の家で親と一緒にドリルをやってみるとかいうことをしている方も、いらっしやいます。でも、それはもう、そのご家庭の考え方なので、それについて私たちがどうこうっていうのは言わないです。

中学生は自分が行きたい高校を見つけたときに、ここに行って、こういうふう将来なりたいんだっていうのを見つけて、進学先に行きたいってなったときに、やはり自分の実力を試すために、模試なんかも受けるし、その模試を受けた点数と自分の実力に差があれば、そこからガーンと勉強しだすし、とても追いつかないと思えば、また違う進路先を探したりもするしっていうことで、主体的に受験勉強にも向かっているなっていうふうに思っているんですけど。

こんな答えでいいですか。

藤代市長  
(議長)

何か昔、一時グリットって、やり切る力っていう単語がすごい流行った時期がありましたけど、多分、自分で主体的に目標に向けてそれに向かって、そのプランを立ててやり切るっていう。所作っていうんですかね、力が身につけている子たちの場合は、おそらくそういう目標が向かえば自発的に必要な学力を身につけていくっていう、多分そういうことなんですかね、今の話を伺っていると。

久保氏

子どもの脳みそは柔らかいし、もう本当に伸びるときはぐっと伸びたなっていう。

藤代市長  
(議長)

モチベーション次第ってことなんですかね。

久保氏

その人の基礎になる力っていうのはやっぱり絶対読む、書く、計算する、とそういう、もう本当に基礎の基礎力っていうのが、学校で身につけるっていうことはもう本当に大事だと思っています。

藤代市長  
(議長)

大丈夫ですか。他にいかがでしょうか。  
コメントでも質問でも。では、長尾さん。

長尾委員

はい。  
ありがとうございました。

夢のような学校で、合同誕生会とか、自分プレゼンの時間とか、本当に何かこう、感動しながら見させていただいて、先生のお話を聞かせていただきました。

印象的だったのが、クラスの中で正座をしてね、椅子に座っている子がいたりとか、帽子をかぶったまま教室で勉強している子たちがいて。

ちょっと前に、うちの子がある問いを投げかけたことがあったんですけど、なぜ、掃除の時間に赤白帽子をかぶらないといけないのか。

それを学校の先生に聞いたときに、やっぱり学校の先生もちょっとその問いの答えがいろいろなことを言ってはくださるんですけど、私の子どもはちょっと納得がいなくてっていう話をしていて。

でもなんか、よくわからないけどでも学校のルールだから、それを私たちは、今までこう守ってきたとか、そういう従順なところが、学校の秩序にも繋がっていたりするのかなあ、と私は思っていたんですが、こういう自由な学校の中で、授業中に混沌状態になったりとか、そういうことはないのかなあと。

もし、その混沌状態にならないように、何かこういうルールはある、というものもあれば教えていただきたいなと思いました。

久保氏

ありがとうございます。  
帽子のことはね、よく議論になるんですよ。

ただ、なんかあれがやっぱり心地いい子たちがやっぱりいる。それを絶対外さないといけないっていう、ちゃんとした理由っていうのは、みんなの中で共通理解されないの、そのままなんですけども、ただ食堂では、脱ぐんです。

なぜかという、やっぱり外に行ってちりや埃が、おそらく帽子とかにはつきやすいから、それで食堂に入るのはまずいよねっていうことを、食堂スタッフが言ってくれて、それを各クラスで話して、みんなそうだねってなったので、食堂では帽子を取るっていうルールがあります。

みたいな感じで、本当にどうしてなのか、なぜなのかっていうことを、大人も考えるし子どもも考えるし、その中で1つ1つルールはつくっていい

っているっていう感じなんですよね。

混沌とした状態、もしかしたら初めの頃はあったかもしれないです。

やっぱりまだ大人が慣れなくて、インストラクションもそう上手ではないとか、課題の設定の仕方も上手じゃないとか、スケジュール表も、今のようになんかパターンは最初なかったですし、やっぱり混沌とするには、子どもにとっては理由がある。そのためにはどこを改善したらいいかっていうことの改善を繰り返しての今で、現在は本当にブロックアワーの時間っていうのは、さっきの動画にあったような雰囲気では流れてはいるんですよね。

それでもやっぱりちょっと声大きくない？とか、邪魔じゃない？とか、というようなことはやっぱりあって、私は全校、毎日回りますけれども、というようなことは、やっぱり担任の先生に、今どうなっている？、みたいな話はするし、逆にきゅっと締まっていたら、何した？っていうような話もするし、きゅっと締まっているときは大体、対話があっています。

1人の子が、ちょっとこの頃、ブロックアワーの時間、みんな集中できなくて、自分も集中できなくて苦しいんだよねって。

もっとみんなで考えない、とかいうような提案をして、サークルで話し合っ、じゃあ、ああしよう、こうしよう、というようなことをルール決めて、今こうなっているっていうようなことがあって、私がおかしいなと思ったときには、同じように子どももおかしいなと思って、自分たちの中で話が起きているっていうことは、起きていますね。

答えになりましたか。

藤代市長  
(議長)

ちなみに、渡邊教育長の紅白帽に対する答えは、何かもしあれば。

渡邊教育長

いや、授業中のじゃなくて、今の掃除の相談のときにですよ。なんでかぶるのかって、埃をよけるからですか。

藤代市長  
(議長)

髪に埃がつかないようにっていうことですよ。

渡邊教育長

それしか考えられませんね。

藤代市長  
(議長)

だったら逆にマスクしなくていいのかみたいなね、あるかもしれないですけどね。

こういう議論を学校でするのが結構大事な気はしますよね。

渡邊教育長

そうですね。

小学校の先生、何かありますか？

藤代市長  
(議長)                   では、斉藤先生。

教育センター  
所長                   紅白帽の件ですけど、自分がいた学校では、縦割りの掃除だったんですね。  
                          ですので、みんなが白い帽子をかぶって、ただその中でリーダーになっている子だけが赤帽子だったんです。  
                          その子のところに集まって、今日の掃除の内容を確認して、最後反省して帰っていく。  
                          だけど6年生がいないときには今度は5年生が赤帽子になって。

藤代市長  
(議長)                   学年で1年から6年生まで1つのグループを組んでいるってことですか。

教育センター  
所長                   はい。それで縦割りで掃除をやっていて、そのために、子どもたちがリーダーを見分けるために帽子をかぶっている、っていう理由でやっていた学校は、自分が所属したところではありました。  
                          長尾委員のところ、そういう理念でやっていたかどうかわかりません。

藤代市長  
(議長)                   だから当たり前を疑ってみることも大事ですよ。謎ルールもありますからね。  
                          そういうのを見直していける、対応しながら変えていける環境になっていくといいですね、印西市もね。  
                          他にいかがでしょうか。  
                          いいですよ。教育委員の方々でも、それ以外の事務局の皆さんでも、聞きたいことあれば。  
                          実は、この手前の時間で久保先生のお時間をいただいて、今日ここには参加できない、指導主事の若手の先生方との座談会を設けさせていただいて、その場でもすごく先生方がいろいろな、活発な意見が出たんですけども。  
                          そのあたりも踏まえつつ。加藤先生、何か。  
                          今日いつもより、大分生き生きした顔されていますけど。

学務課長                   主体性の学びとは質問が違うのですが、立場上、どうしてもちよっとこの質問を試みたかったなっていうことで、先生の資料を事前にもらって、目が止まったのが、4つの活動のある時間割り、いわゆる時間割表なんです。  
                          それと、それが小学校で、あと子どもが書いたやつで中学2年生のスケジュール表があったと思うんですね。  
                          どうしても、例えば久保先生の言われている学校でのそのイエナプランの質を上げるためには、大人、いわゆる先生方のスキルアップを図らなく

ちやいけない。そのためには、いかにその時間内で、可能であれば時間内でその時間を確保してあげる。

いわゆる時間外勤務が多くならない中で、何とかこれを先生たちが前向きに進められるようにやっていかなくちやいけない、というふうに考えるのが、校長先生の責務の1つなのかなというふうに考えております。

この時間割表を見たときに、まず1つ、目が止まったのが、いわゆる子どもたちの朝のサークル活動が8時25分、中学校を見ると、これ9時からのスタートになっていたかなというふうに思います。

結構これは小中も遅いなというところですよ。

公立学校であれば、もう8時に子どもたちが着席して、というところからスタートしていくんですね。ですので、ここはちょっと遅いなと。

でも、よく見ていくと、休み時間がないなというところですよ。

今ちょっと言いましたが、勤務時間内にいわゆる先生たちが業務をこなす時間を何とか確保しなくちやいけないというふうに、自分も学校にいたときは考えました。

ですので、この1日の流れをいかにどうしていくのかっていうことは、自分も考えていたわけなんです。ここで多分水曜日、小学校でいえば水曜日が午後の時間がないんだと。

今、説明の中で研修の時間を取っていると、こう言いました。

なかなか、これ中学校でも難しいんです。今ではまだ部活動がありますし、なかなかそういうところは難しいわけなんです。

先生たちのこの勤務時間の中で、業務時間を作り出すために、大日向小学校では、何かこう工夫した点、ここは何とか学校として頑張らなくちやいけないっていうふうなところってあったのかなと。

今、公立学校で働き方改革というところが1つ問題になっているわけなんです。その辺について、大日向小学校、中学校さんでは何か取り組んできたところっていうのはあるのかなっていうことをちょっと聞いてみたいなというふうに思います。

ちょっと長くなって申し訳ません。

久保氏

まず、中学校の9時スタートはスクールバスの関係です。もうスクールバスがないうちの学校は立ち行かなくて。

それでどうしても人数の制限があつて、中学生をちょっとずらしているんです。

一緒じゃないことで困っていることの方が多いです。

あと、部活はないです。なので、放課後の時間はすべて準備に充てられます。

それから、うちの職員は、6時ぐらいには大体帰っているんですよ。何ですかね。

あと、ものすごく研修になっているのは、さっきも話した4人のチーム。4人のチームで、それぞれの学年を回すっていう、その会議が木曜日に入るんですけども、木曜日だけは6時には帰らない人たちが多。そこ

が一番、学年チームで話して、お互い研修し合う時間にはなっていると思います。

あと水曜日は毎週ではないんですけども、月に1回ぐらいは何もない日とかもありますけど、大体、カリキュラムの研修、それから、個人でやっていることの研修、それからイエナプランについての研修っていうような柱を立てて、研修やっているんですよ。

あと、一般的な学校と違うというと、指導案とかを求めたことは1回もないです。

いろいろな提出しないといけない書類っていうのは、ないです。

多分全部、授業準備していると思います。

学務課長 付け加えて、ちょっとお聞きしたいんですけども、そうすると、久保先生、公立学校の先生やられていましたから、公立にいたのでよくわかると思うんですが、校務分掌はほとんどないってことですね。

久保氏 校務分掌はあります。

学務課長 ありますか。  
その校務分掌の量的には、いわゆる今の大日向小・中学校さんと、公立学校と比べると、大日向小学校さんは少ないですかね。

久保氏 そうかもしれないですね。  
私は中学校と小学校と比べて、一番大きいことはやっぱり部活がないことでしたね。放課後の時間がもう、さっと授業準備に充てられるっていうのは。

校務分掌、そんなに大変でしたっけ。

学務課長 意外と大変です。

久保氏 年間通してこの担当だと、生徒指導部は大変でしたよね。

学務課長 なるほど。  
そうすると、今の状況からすると意外に、先生たちは今の授業の準備の時間に放課後の時間は結構充てられているっていうことですね。

久保氏 ほぼそうなんじゃないかと思います。  
あとは夏休みも、もう自宅研修も全然。学校は日直の人だけでいいので、夏休みも結構いろんなところに出かけて行って、いろんな会議に参加したりだとか、海外に行ったりだとか、なんかそういう英気を養うことをしてくれていると思っています。

学務課長 ありがとうございます。

藤代市長  
(議長)

これは結構大事な論点で、たぶんイエナプランという文脈で、大日向小学校という、どうしても教育のコンテンツ側に目が行きがちじゃないですか。

でも、今、全国の学校で一番実は困っているのって先生方の負担がどんどん高まっている中で、先生方がそうやってしなやかに働いていけるっていうのは、実は、これからいろいろなところで大日向小学校、その点で聞かれていくんじゃないかなと思いましたね。

久保氏

いや、でもそうですね。

準備等、本当にチームでやっているっていうのは大きいかもしれないです。自分のクラスを1人で抱えてやっている、っていう姿はないですね。すごくオープンにみんな一緒にやっていますね。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。

さっき事前の若手の方との議論の場であった、保護者はどう関わっていたらいいのかとか、振舞ったらいいのかっていうところについて、もしよければ、この場でもう1回シェアいただけると幸いです。

そんなことをおっしゃっていましたよね。正確に言うかどうかという質問でしたっけ。

保護者の関わりはどういった形でやっているのか。

久保氏

おかげさまで、すごく学校の理念やイエナプランの理念を理解していただいた方々に来ていただいているので、基本、学力っていうのはすごく広いとらえ方をしてくれていて、テストの点数だとか進学だとか、そういうことの比重よりも、人としての成長の方に重きを置かせてくださっている保護者が大変多いっていうのが、私たちの学校の支えにはなっていると思うんですよね。

あと、保護者も主体的な方が多くて、もういろんなことに積極的に参加くださって、例えば校庭とかの草とかがすごく茂っていたりすると、「久保さんそろそろやらないとね」って、「ちょっと声かけるよ」とか言って、ワーッと声かけてくれて、みんなで草取りの日とか作ってくれたりとか、いろんなイベント等がやりたいので、夏休みもいろんなクラスで、いろんなイベントをやっていましたけど、大体保護者が中心になってやってきていて、さっきね、皆さんが笑ってくださったのが、体育祭とか、運動会、うちの運動会もちょっと変わっていて、全員が選手になって、決まった種目に出るとかではなくて、子どもたちが種目を考えて、自分たちのクラスではこういう種目をやりますっていうのを言って運営するんですよね。

もう、全員が参加。大人も、子どもも、やりたいなと思うものに、その当日のその時の気持ちで参加するっていう、楽しまなければ損、っていうような運動会なんですけども。それでも、それが物足りない人達もいて、午前中で終わるんですけれども、午後、保護者主体でやっていいですかっ

て聞かれるから、どうぞって言ったら、ある場所ではバーベキューやっているし、ある場所ではみんなで何か楽器を抱えてみんなで歌っているし、あるところでは走り足りなかった人が、記録を取って、とかボールを投げて記録取ったりとか体育祭の続きをしていたりとか。でもそれも全然決まりではなくて、その年がそうだったっていうもので、翌年はまた全然違うプランが出てきたりするっていうような、本当に柔軟に保護者も動いてくれています。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。

その理念に共感されている保護者の方が全てというのは、確かに大きくはありますよね。

ただ、印西市の場合も小規模特認校みたいな、その全市から子どもたちが集まっている学校もあるので、そういった学校では比較的そういった同じ理念のもとに取り組みを進めやすいのかなっていうのはちょっとお話を伺っていて思ったところですね。

あともう1個、その場で出た質問の中で、これもいろんなところから聞かれていると思うんですけど、公教育の中で、このイエナプラン教育を展開していくために、どうしていったらいいものなのか、論点としては大きすぎるんですけど、久保先生がいろんな自治体を見られてこられた中でのご意見などあれば教えていただけると幸いです。

久保氏

何かこれはもう締めみたいになりますか。

藤代市長  
(議長)

まだもうちょっと大丈夫です。

久保氏

難しい、そこが一番難しいですよっていうことをさっきも話していたんですけども。

本当にイエナプランの言う理念だとか普遍的だし、誰も文句はつけられないと思うんですけども、じゃあ、どの学校でもこれができるのかって言ったときに、簡単ではないだろうなっていうふうに、正直やっぱり思うんですよ。

でも、じゃあ、何も役に立たないか、イエナプラン、私たちの実践が、というと、いや、そうじゃないだろうと思って、私たちがやっていることの意味とか意義とか、どこにあるかなあって思うんですけども、1つは本当にさっき市長がおっしゃってくださったように、当たり前っていうところを問い直す、本当にそれ大切なこと、本当に大事な、本当にやらなきゃいけないっていうのは、問い直してもいいのじゃないかなっていうふうに思います。

もう脈々とやってきた日本のこの教育。たくさんの先生方の努力とかいうものが、無駄な訳は絶対なくて。オランダでもリヒテルズさんなんかも言うけど、多くの生徒を相手に1人の大人が一定の力をつけるっていう、

その能力に関しては、日本の先生ってすごいわよって、おっしゃるんですよ。

やっぱり本当にきちんとした多くの方たちにきちんとした力をつけてきたっていう、その力は全然否定しなくていいと思うんですよ。

うちの学校でも、長いインストラクションはしないよとか、本当に大事なことだけインストラクションするよとか、みんなで目指すけれどもやっぱり上手な先生っていうのは、もしかしたら40人相手に一斉授業するのもとても上手だと思うんですよ。

ただ一方的にしゃべっていていい授業はできないので、40人相手にしゃべっていても、きっとその40人が何を考えているだろうという思いをめぐらせているし、そこっていうところで、きっと何かアクションを起こしていると思うし、そもそも授業デザインがきちんとしていると思うので、そういう今まで日本の教員が一生懸命やってきたことの否定は絶対しないほうがいいと思う。

ただ、それをやっぱり子どもが主体だっていうことを抜きにして、自分のために、自分のためじゃないかもしれない、何か、自分が中心になってすべてやってしまうと、それは違うし、自分がよかれと思ってやっていることで違うこともいっぱいあると思うし、もう本当、子どもに聞いてみたらいいですよって先ほども言われましたけど、本当に子どもにどうって聞いてみるっていう、その姿勢をちゃんと持ち続けることなのかなって思うんですよ。

イエナプランは子どもの主体性を大事にするっていう一本の軸、アンド大人の働きかけを大事にするっていう軸、その両方のかなうところを目指しているんですよ。

私が言うと、誰だってそこ目指しているでしょって言われるんだけど。

大人の働きかけを大事にするっていうときに、やっぱりその子どもに聞く、この子にとってどうなの、この子にとってどんな意味があるの、子どもにとってどういう意味があるのっていう、その視点を持つての働きかけをするっていうことが大事なのかなと思っていて、そういう何か大人のあり方、考え方、視点は、私たちの実践を通して、いや、それ間違いないよっていうことはお伝えできるのかなと思うんですが。

藤代市長  
(議長)

今のそのあたり前を問い直すとか、その手前で対話リフレクションとかかってさっきもありましたけど、こういう場って今の小中学校ってどれぐらいあるものなんですか。

探究学習は何となく浸透してきたのはわかってきたんですけど。

要は、場そのものをもとにつくっていくみたいな話と、あとは自身と対話しながら、人と対応しながら向き合っていくみたいな2つの論点だと思うんですけど。

あんまり機会ってないものですか、それともやっぱりある程度確保されているものなのか。

渡邊教育長

小学校と中学校でも違うと思います。

この大日向小さんみたいに決まった枠といいますか、そういったものはやっぱり少ないですね。そういうのをとっているのは少ないです。

ただ、年間を通して、この時期にこんなところで学級会をやろうと、それについては小さなグループでまず話し合いをして、またそれを全体でシェアして、私たちの学級はこんなふうにしていこうとか、そういう時間を設けている学校はたくさんあると思います。

ただやっぱり少ないですよ。そういう時間本当に大事なことだと私自身も個人的にも思っています。

藤代市長  
(議長)

リフレクションみたいなものってあるんですか。自己開示に近いんだと思うんですけど。

渡邊教育長

はい、それもありません。

藤代市長  
(議長)

学級会とはまた別で。

渡邊教育長

はい。

やっぱり1度、特別活動の時間ですとか、あるいは行事の後とか、そういったところで時間を設けて、次に生かせること、なんていうのを考えさせる時間っていうのもありますね。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。

そろそろ時間になってきたんですけど、ちょっとそうですね。

他、どうですか。皆さん何か質問とかコメントとか、特に今後の印西市での教育のあり方っていう文脈で、何かコメントとか質問なんかあれば。

寺田さんお願いします。

寺田委員

いろいろご指導ありがとうございました。

私の経験なんですけど、たくさんの学生をアルバイトで雇った経験があるんです。もちろん落ちこぼれも結構いました。

でも、みんなどうやったら社会に順応していけるかっていうことを、本人と考えて、結局、結論はその子の価値観を見いだしてやることだと思いました。

それでみんな順調に社会に順応していますので、その辺を先生にも教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

藤代市長  
(議長)

あとすごく具体的な話でいうと、印西市の場合って結構小規模になりつつある学校が増えてきているんですよ。

かなり二極化が進んでいて、小学校でいうと1200人を超えるような学校がある一方で、全校生徒50人60人みたいな学校があるっていう、

かなり全国の中でもまれな自治体なんですね。

その中で、今小規模特認校は1校ですけれども、こういった小規模校が増えていく中であって、こういった公共の小規模校でイエナプラン的な教育を、展開していく上でのポイントとか、ここら辺を気をつけたほうがいいですよとか、逆にこの辺ができると進んでいくんじゃないですかね、みたいなことがあれば教えていただけると幸いです。

久保氏

小規模校、本当にイエナプラン適していると思います。

さっきもチームワークとか言いましたけど、やっぱり1000人規模の学校のチームワークってやっぱりどうしても難しいし、お互い他者を理解するって、他者のいることで自分もよくわかるとかいうようなことを大事にする中で、やっぱり対話、すごく大事で、それも大規模校だとお互いわかり合う対話っていうのはやっぱり難しくなってくるし、100人ぐらいの規模だと、名前を全部覚えている。子どもも顔と名前が一致する。そういうところで起きるお互いの関わり合いっていうのは、すごく意味があると思うので。

小規模校、いいなと思うんですよね。イエナプランともう本当に親和性強くって。

ただ、余りにも人数が少ないと職員を多くは置けなかったりとかするじゃないですか。だけど、異年齢学級にすれば、日本では異年齢学級は複式学級と重なって、何かすごくマイナスなイメージがありますけれども、全然そうじゃないので、少ない職員数で学校運営したりすることもできると思うから、ぜひ取り入れて欲しいなと思います。

藤代市長  
(議長)

そのときにおそらく次の論点で絶対聞かれるのが、多分先生方が一番対応していく上で苦勞されるじゃないですか。

どうするといいいんですかね。

久保氏

やりたいという方に行って欲しいなと思うんですよ。

やらされたことに関しては責任転嫁も簡単にするので、私たちもここが難しかった、ここは試行錯誤だったって言うけど、誰も「だからイエナプランをやめましょう」とは言わないんですよ。

イエナプランの理念、みんな理解してやりたいと思ってきているから、いや、もっとこうしたらよくなるんじゃないかっていう方に頭が向くけれども責任転嫁しないんですよ。

でも、やれって言われたことは、いや、だからこれじゃだめでしょうって、もっとこっちの方がいいんですよ、こっちの方が効率いいんですよとか、成果が出るんですよっていう責任転嫁は簡単にできると思うので、やりたいっていう方にぜひやって欲しいなと思ってます。

藤代市長  
(議長)

異動配置とかってどうなんですか、それって。

言いつらいことが多いと思うんですけど。

渡邊教育長       そうですね、やっぱり子どもでもそうです。やらされた感は絶対いいものは生まれませんからね。  
先生がおっしゃるように、やっぱりやりたい教員で、その前にまずはだから、このイエナプランというものを改めていろんな先生方に知ってもらおうというか、勉強しなきゃいけないっていうのもあると思います。  
その上で、じゃあやりたいっていう、この学校でやるぞっていうふうになったときに、そういった教員を何人集められるかと、その辺ってすごく難しいですね。  
定数の問題もありますし、県の方の配置になりますのでね。  
そこは非常に難しいところだなと思います。

藤代市長  
(議長)           久保先生に聞く話じゃないかもしれないんですけど、日本で一応公設公営でイエナプランやっているのは広島にあるじゃないですか。  
福山市の常石ともに学園が唯一だと思うんですけど、逆にあそこはどうやっているんですかね。  
それは聞いたらいいい話だと思うんですけど、彼らに。

久保氏           どうやっているというのと。

藤代市長  
(議長)           多分あそこも先生方は県の職員で、公務員の方々になるんだと思うんですよ。

久保氏           そうですね。

藤代市長  
(議長)           そこはある程度、県と自治体が連携をしてっていうことなんですよ。

久保氏           福山市の教育委員会がかなりバックアップして、教育長や指導主事なんかも、うちの学校にも来てくださったりしていますし。  
職員の研修なんかも、やっぱり年を追うごとによくなって、充実してきているなというふうには思います。  
最初難しいなと思っていても、本当にこんなことって、だんだんこう、腑に落ちていくにつれて、そんなに難しいことではないよって感じるようになってちゃったりする。何かスタートしてみる中で、どんどんこうやりやすくなっていくっていうのはあるかもしれないです。

藤代市長  
(議長)           なるほど。今、印西市だと原山小学校ってありまして、元校長先生も今そちらに座られていますけど。  
2年連続でレゴブロックでロボット作ってプログラム動かすって競技の世界大会に、実はその学校の子たちが出ているんですよ。  
そこの学校を見ていて、すごいなと思ったのは、先生方が普通にそのうち、生成AIとか使いこなしたりする姿を見ていて、やっぱり先生たちっ

てすごく真面目で、しかも優秀な方が多いので、順応できちゃうんだなというのは感じたところだったんで、もしかしたらイエナプランもちゃんとしたリーダーシップをとれる人がいて、ちゃんとその育成のプログラムがあれば、意外にできるのかなって、これちょっとまた教育長が困っちゃうと思うんですけど、そんなことを今、おふたりのやりとりを見ていて感じたところですかね。

久保氏

なんかね、もう本当にそんなにもものすごく変わったことではないのかもしれないです。

なんかこう、大人も保護者もだけど、大人も肩の力を抜いて、自分がどう考えるのか、どうありたいのか、子どもとどう接するのかっていう話にどんどんなっていくんですよね。

学力に関してもこの子にとって、どんな力が必要でって、何か一人ひとりね、さっき先生が一人ひとりの個性をっておっしゃいましたけど、本当に一人ひとりを見つめるっていう、何かこうやりながら楽しい作業ですよ。

藤代市長  
(議長)

ありがとうございます。

ちょっと大分時間も10分ほどオーバーしてきましたので、皆さんよろしいですか、他に何か言っておきたいこと。大丈夫ですか。

最後にざっくりまとめさせていただくと、大日向小学校で掲げている自立する、ともに生きる、世界に目を向ける。

まさに今、我々が教育ビジョンの中でも、今日、渡邊教育長の方からも説明いただきましたけれどもその方向性というのは、やっぱり非常に共感するものがありますし、やっぱりその方向性なんだっていうのを確信を持ったところでもあります。

あとやっぱりいろんな要素を、このイエナプラン的なものを取り入れていく素地はあると思うので、そのあたりの具体的な話っていうのは、ぜひワーキング等々でも議論をさせていただければと思います。

あとはやっぱり最後に、その通りだなと思ったのが、大人も力を抜いて、子どもとどう接していくのか。やってみたら楽しい作業なんだっていうのが、それはすごく本質だなと思っていて、より先生方が楽しみながら学びの場を作っていけるような、そうしたあり方をやっぱり考えなきゃいけないなっていうのを改めて、先生の話をもって今日思ったところですかね。

本当に今日は、貴重な夏休み期間中だと思うんですけども、本当に貴重なお時間いただきましてありがとうございます。

改めて久保先生に皆さん大きな拍手をお願いいたします。

久保氏

長時間ありがとうございました。

藤代市長  
(議長)

ぜひこれを契機に、印西市のこともいろいろと相談に乗っていただけると幸いです。  
一旦これで事務局の方にお戻しをさせていただきます。

企画政策課長

久保先生、教育委員の皆様、長時間にわたりましてありがとうございます。  
なお、本日の会議に関しますアンケートにご協力をお願いいたします。  
Y o u T u b e 配信をご覧の皆様は、概要欄にリンクがございますので、そちらからご回答お願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。  
それでは、以上をもちまして、令和7年度第4回印西市総合教育会議を閉会いたします。  
お疲れ様でございました。

(午後4時40分)

印西市総合教育会議設置要綱第8条の規定により、上記会議録は、事実と相違ないことをここに承認する。

令和7年9月19日

印西市教育委員会委員

屋敷 毅